

兵士を襲った感染症と飢餓 —インパール作戦とビルマ—

(会期：令和2年7月18日～11月1日)



ごあいさつ

日本から2,000 km以上も遠く離れたビルマ（現在のミャンマー連邦共和国）は、アジア・太平洋戦争において、日本軍がインドのイギリス軍や中国雲南地域の中国国民党軍などと対峙した西の最前線でした。昭和19年（1944年）3月に様々な情報を無視した陸軍の作戦計画のもと実行されたインパール作戦は敗北に終わり、多くの兵士が犠牲となりました。アジア・太平洋戦争を通じて、ビルマ・インドでの戦死者は166,900人に及びます。多くの方々には、満足な補給を受けられない中、飢えや感染症で亡くなりました。

今回の企画展示では、インパール作戦やその後のビルマでの戦争を中心に、戦場に蔓延したマラリアやアメーバ赤痢などの感染症に苦しめられた兵士たちの姿を体験談やモノ資料で紹介します。

今回の企画展示におきましては、厚生労働省検疫所、公益財団法人結核予防会結核研究所より多大なご協力をいただきましたこと、深くお礼申し上げます。

最後になりましたが、新型コロナウイルス感染症蔓延防止に御尽力されているの方々に感謝するとともに、病気の一刻も早い終息を願っております。

令和2年7月18日

滋賀県平和祈念館

第1章 プロローグ 戦場となったビルマ



第1節 戦場となったビルマ

『ビルマ』（現在のミャンマー連邦共和国）は、東南アジアの西部に位置し、インドや中国、タイなどの5ヶ国と国境を接しています。日本の約1.8倍の国土（約68万km²）に人口約5,141万人が住むこの国は、ビルマ民族やシャン民族、カレン民族など135もの民族が暮らす多民族国家です。人々は仏教（上座部仏教）やキリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教など様々な宗教を信仰しています。

熱帯のビルマでは大量の雨が降る雨期（5月～10月）と雨があまり降らない乾期（11月～4月）があります。

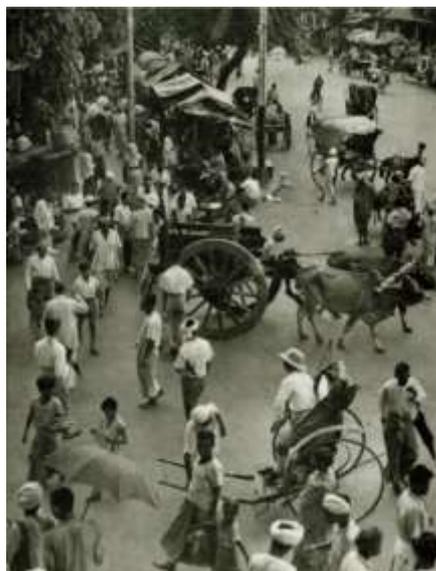
イラワジ河に沿って、河口付近の大平野や古都マンダレーがある中流域の平原地帯を中心に、古くから稲作が盛んに行われてきました。11世紀頃以降、ビルマ民族を中心とした王朝がこの地を支配しましたが、1885年、第3次英緬戦争の結果、英国の植民地（英領インド帝国ビルマ州）となりました。植民地時代のビルマでは、インド向けのコメ生産を推し進める英国の経済政策により、インド移民の増加や農民の小作人化が進み、人々は貧困に苦しみました。20世紀初めには、農民反乱や反英デモなどが頻発し、英国の植民地から独立・自治を求めるナショナリズム運動が高まりました。

昭和17年（1942年）1月、そうしたビルマへ日本軍が侵攻を開始したのです。



ペゲー大仏を眺める日本軍兵士たち

（『写真週報』第214号、昭和17年4月1日、情報局発行）



ビルマの中心都市ランゲーンの喧噪（『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行）



ビルマ中部の中心都市 古都マンダレー（『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行）



左：日本軍の入城を歓迎するマンダレーの人々

右：日の丸を掲げるシャン民族の住宅

（『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行）

第2節 ビルマとその周辺での戦没者数

アジア・太平洋戦争において、ビルマ・インド（主にインパール作戦）での日本軍関係者（軍人・軍属）の戦没者数は約166,900人といわれています。滋賀県出身者は、タイを含めて、この地域で4,639人も亡くなっています。その死因の多くは戦闘ではなく、飢えや病気であったといわれています。

ビルマ各地の戦場を転戦した小林育三郎さんの部隊（第53師団歩兵119連隊第2大隊第2機関銃中隊）の昭和21年（1946年）4月1日の状況を記した『人員状況表』では、所属していた179人の将兵のうち、少なくとも100の方が戦争で亡くなられたことが判ります。死因別では、戦死者（戦闘により死亡）45人に対して、戦病死（戦争中の病死者）55人が上回っています。戦後、生き残った方々の大半が捕虜収容所に収容された状況下で、収容所で生存を確認できた将兵は25人だけでした。『入院』として扱われた52人は、戦争中に病院へ移送され、消息不明となった人たちでした。恐らくその大半が病院で亡くなられたと考えられます。

Mさんは、インパール作戦に参加した自分の部隊（第15師団歩兵67連隊通信隊）の戦没者120人のうち、約100人が餓死・戦病死であったと証言されています。

なぜ、これほど多くの兵士たちが、飢餓や病気によって亡くなっていったのでしょうか。

【体験者手記

—感染症にも敗れたビルマの日本軍—

（小林育三郎さんの『ビルマ戦場日記』より）

第53師団（歩兵第119連隊第2大隊第2機関銃中隊）の中隊長だった小林育三郎さんは従軍中、日々の出来事を日記に書き記しました。戦後、日記をもとに出版した『ビルマ戦場日記』には、ビルマの戦場で見えない感染症という敵に敗れた日本軍の最後の姿が記されています。

昭和20年7月29日 シエンジ南方

※シエンジはビルマ南部の地名

三時「森口が死にました」と銃前哨に起こされる。清水が脈を診る、まだあり。しかし、最早時間の問題。五時、清水「今死亡」とうとう再起不能。ビルマの土になったか。

七時半全員整列して埋葬。さきに田島、今また森口と二人を失う、六中隊の二柱と共に四つのお墓を眺めて胸かきむしられる。弾に斃るるは本望なのに無念マラリアで二名も死ぬ。中隊現員二十九名。

坂本軍医の来診も遅かった。菊池のアメーバ（アメーバ赤痢）も危険と言う。昨日から今日にかけて熱発（発熱患者）続出。不思議に熱発一名もない時が続くかと思えば、出れば続出。俺も体がだるい。三十九度四分。 —以下略（後略）—

小林さんの部隊が終戦を知ったのは8月20日でした。

8月15日 シエンジ南方

患者続出で待ち兼ねた坂本軍医がやって来る。井狩、坂川、滝、清水、中野、松原と十一名の内の六名が熱発して勤務の割出しに四苦八苦する。

俸給が届く。七、八、九月分で三百四十五円、前渡し分までくれる。これで千五百円からの金持になったが『猫に小判』このジャングルでは使いようもなし。

一日中、功績整理。戦闘期別に参加人数を出して此の期間の戦死、戦病死、入院と細かい事務に頭が痛い。夕方完了する。今日は大仕事。

8月28日 シエンジ南方

一昨日、死亡通知を受けた三名を追加して、死没兵の功績整理。之で中隊の死没者九十九名となる。生存者八十一名。この内、入院患者五十二名でこの

中に死没している者は半分以上あるだろう。あれを
思い、これを思うとよくぞ今日まで命ありと感無量。

福永がやって来る。「明日（捕虜収容所へ）出発」
の命令伝達。いよいよこの陣地を発つ。一中略一
明日から我々はどうなるのか何も判っていないが、
『最後の晩餐』はみんな揃って賑やか。熟するのを
待っていたバナナも今日限りの命。



小林育三郎さん関係資料

左上：「陸海軍人二賜ハリタル勅語」

右上：「緬甸地区全日本将兵に告ぐ!!!」

終戦にともなうて緬甸（ビルマ）の日本軍兵士に出された『即時戦闘行動停止』を命じる文書

左下：「事実証明書」（小林育三郎さんの病名証明書）

兵士たちは病気にかかっても、軍医・部隊長が認めた病気の
証明書がなければ、部隊を離れて病院へ入院できませんで
した。

右下：「人員現況表」



「人員現況表」が語るビルマの戦場

小林育三郎さんが捕虜としてアロン収容所に収容されてい
た昭和21年（1946年）4月1日の部隊の状況をまとめた『人
員現況表』です。消息不明の入院者数が、終戦直後の『死没
兵の功績整理』の数字と同じ52名であることから、その多く
が戦争中に病院で亡くなられたと考えられます。



第2章 インパール作戦とビルマの戦場

第1節 ビルマでの戦争

1. ビルマでの戦争 その1

昭和14年（1939年）、英国と米国は日本と戦っ
ていた中国（中国国民党軍）を支援するため、ビル
マから中国の重慶へ軍事物資の輸送を始めました。
日本軍はそれを阻止するため、アジア・太平洋戦争
開戦直後の昭和17年（1942年）1月、ビルマへ侵
攻しました。

日本軍は、英国からの独立を望むビルマ独立義勇
軍の支援などもあり、快進撃を続け、5月にはビル
マ全域を手中に収めました。昭和18年（1943年）
8月には、侵攻に協力したビルマ義勇軍との約束に
従い、日本はビルマの独立を認めました。

一方、ビルマから撤退した連合軍は、中国へ軍
事物資の輸送を再開するため、インドからビルマ北
部・中国雲南地域を経由して、昆明に至る新たな輸
送路（レド公路）を計画します。昭和18年（1943
年）5月、ルート確保のため、中国軍が日本軍の占
領地（雲南省怒江西岸地区）へ反攻を開始し、10月
には米中合同軍によるビルマ北部（フォーコン谷地）
への侵攻が始まりました。また、連合軍がビルマ
周辺での航空戦力を大幅に増強した結果、インパ
ール作戦の実施が決まった昭和19年（1944年）1月
頃にはビルマの制空権は完全に連合軍のものとな
っていました。

2. ビルマでの戦争 その2

アジア各地で劣勢となった日本軍は、戦況を打開
するため、ビルマからインド東部の軍事拠点インパ
ール侵攻を計画します。

昭和19年（1944年）3月に始まったインパール作戦は、英国軍からの予想を超えた反撃と、前線への食糧輸送などを軽視した作戦計画により、日本軍の敗北に終わりました。同じころ、中国雲南省の怒江西岸地区やビルマ北部（フーコン谷地）で連合国軍と交戦していた日本軍の部隊も窮地に陥り、援軍として新たな部隊（第53師団）が派遣されました。しかし、その後も連合国軍の侵攻は続き、昭和19年（1944年）末までには、ビルマ北部の大半が連合国軍に占領されました。

3. ビルマでの戦争 その3

昭和19年（1944年）12月、日本軍はビルマ北部の奪還を断念し、ビルマ中部の中心都市マンダレー付近に、イラワジ河に沿って全長約250kmの防衛線を設け、南下する連合国軍を食い止める作戦（イラワジ会戦）に出ます。大河をめぐる約2ヶ月間の攻防の末、昭和20年2月14日、連合国軍の主力が手薄となった南部の防衛線を突破し、3月3日には日本軍背後の都市メイクテーラを占領しました。日本軍がメイクテーラの飛行場の奪還（メイクテーラ会戦）を試みるなかで、マンダレーが陥落し、ビルマ国民軍も離反しました。

3月28日、日本軍はビルマ中部の防衛を断念し、ビルマ南部へ撤退しました。その後も敗退を重ねた日本軍の各部隊は、隣国のタイやビルマ南部のタイ国境付近などで終戦を迎えました。終戦後、多くの兵士たちは、1～2年半もの間、捕虜収容所での強制労働を強いられた後、帰国することとなりました。



古都マンダレーへ入城する日本軍（『大東亜戦争 ビルマ作戦』昭和17年11月、同盟通信社発行）



怒江西岸地区の日本軍兵士（『大東亜戦争報道写真録』昭和17年12月8日、読賣新聞社発行）



日本軍のビルマへの進軍（昭和17年1月、タイ国境付近）（『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行）



ビルマの戦場（『大東亜戦争報道写真録』昭和17年12月8日、読賣新聞社発行）

第2節 インパール作戦



パナール写真：インパール作戦

—インパールへ向けて川を渡る歩兵部隊—

（『読賣ニュース焼付版』昭和19年4月14日、
読売新聞社発行）

インパール作戦は、ビルマから国境付近の急峻な山岳地帯を越えて、インド東部の軍事拠点インパールを攻略する作戦でした。前線への物資補給の難しさから、陸軍内部でも否定的な意見が多かったこの作戦は、英国の植民地であったインドの独立運動を後押しし、インドを味方に引き入れようとする政治的な思惑もあり、実行されました。

昭和19年（1944年）3月15日より、3つの師団（第33師団・第15師団・第31師団）が別ルートから侵攻を開始し、コヒマなどの途中にある英国軍の拠点を攻略しながら、4月29日までにインパールを占領する計画でしたが、実際には、インパールやコヒマなどの強固な敵陣地に阻まれ、日本軍はインパール郊外やコヒマで英国軍と対峙することとなりました。

長期戦となった戦場では、制空権をもつ英国軍が航空機を使って大量の物資を補給できたのに対し、山岳地帯の悪路を人力で運ぶ必要があった日本軍は、すぐに食料などが枯渇し、兵士たちが飢餓状態に陥りました。食料不足を理由に第31師団が独断で撤退した結果、日本軍は7月2日に作戦中止を余儀なくされました。

多くの滋賀県出身兵士が所属した第15師団でも、作戦中や退却時に多数の兵士が飢えや感染症などで命を失ったのです。



インパール作戦経過図

「インパール作戦進攻経過概見図」（『戦史叢書インパール作戦—ビルマ防衛』防衛省防衛研究所戦史室、昭和43年発行）を利用して作成。地図は『標準大東亜分図・ビルマ』（昭和18年2月20日、（株）統正社発行）による。



インパールに向かう日本軍の部隊（『読賣ニュース焼付版』昭和19年4月19日、読売新聞社発行）



インパールの戦場へ送る船を組み立てる工兵たち
 (『読賣ニュース焼付版』昭和19年5月7日、読賣新聞社発行)



Mさん関係資料
 左上：ゲートル 右上：図のう
 下：Mさんから国防婦人会杉江班への手紙

インパール作戦に参加されたMさん(守山市)

Mさんは昭和12年(1937年)、召集により陸軍歩兵第9連隊に入隊し、南京攻略戦に従軍されました。昭和14年(1939年)に高熱のため入院除隊後、昭和18年(1943年)に再び召集され、ビルマのインパール作戦に参加しました。戦場では砲弾の破片を頭部に受けるなど、たびたび命の危機に晒され、昭和20年(1945年)8月8日にタイで捕虜となった後、守山へ帰郷されました。



速水孝男さん関係資料
 左：日の丸「速水孝男」(名前を墨書)
 右：千人針

千人針は赤い糸を玉止めに縫って『千人力』と記しています。「玉止め」は「弾止め」に通じることから、弾に当たらず、無事に帰ってきてほしいという家族や知人の想いがこめられています。お守りを入れた袋も縫いつけられています。



左から軍帽、防暑帽、飯ごう
兄弟でインパール作戦に参加された速水孝男さん・速水博さん(長浜市)

兄の速水孝男さんは、昭和19年(1944年)8月3日にティエムで戦死されました。部隊の220名がほぼ全滅されたそうです。弟の速水博さんも爆撃を受け、負傷して土に埋まりながらも救出されて、一命を取り留めたと話されています。

【体験談—インパールへの遠い道のり】

Mさん(草津市)

国鉄で機関士を目指していたMさんは徴兵検査に合格し、昭和18年(1943年)2月、陸軍に入隊されました。昭和19年(1944年)1月、Mさんが配属された第15師団歩兵第67連隊通信隊はタイのチェンマイに集結しました。

(タイの)チェンマイからランバンまで汽車で下がって(南下して)、そっから歩いて、ビルマのシボ

ウまで行きましたんや。1,040 キロかありましたわ。完全軍装でしたから、(装具などが) 20 キロ以上ありましたやろな。機材は全部馬に載せるけど、銃や手榴弾やかかはほんまに重たいし、20 日分の糧秣(食料) をもって行きましたから。(途中で) 8,000 フィート(標高約 2,400m) ぐらいの高い山を超えたことありましたわ。

上官の川嶋少尉の伝令を務めていたMさんはビルマ入国後、上官の入院に付き添って、カロー兵站病院へ向かいました。

上官と一緒に行軍してましたんやけどね、その人が(伝染病で) 体悪うなって、兵站病院に入院したんです。結局、よう(良く) ならんと、死んで行かれましたんや。わしも付き添いでずーといてましたから、(うつって) 体悪かったんです。伝染病やったから、わし隔離されてましたんや。

(5 月になって、部隊に合流するために) 上官の遺骨持って前線のカレミョウまで行きましたんや。そやけど、班長が「せっかく来たけどな、もう今はインパールの戦争はまけてるんや。遺骨下げてはとっても(前線まで) 行けん。遺骨は奉安して来い。」と言いよるんや。「どこへ行くにや」いうたら、「コーリンや、てな。「せっかくここまで来たのになあ」と、思ったけど、連隊の装具やら置いた一るコーリン(師団の後方基地) まで帰りましたんや。そこで「奉安所はない」といわれて、(奉安所のある) ラグーンまで行って、7 月に(遺骨を) 奉安しました。

部隊に合流するため再び、カレミョウに到着した M さんが目にしたものは、インパールで傷つき退却する兵士たちの姿でした。

その時にはね、戦争負けてね。(前線の) 病院から帰って来やはったような人ばかりでした。そんなんで結局、(撤退中の部隊から) 一緒に連れてたってくれゆうて、(置き去りにされた) 病人ばかり 4~5 人連れてね、ほて、わし、(師団本部のあった) ウントまで下りましたんや。



遺骨を抱いて従軍する兵士たち(『アサヒグラフ』69 報、昭和 18 年 4 月 28 日、朝日新聞社発行)

【体験談—あとインク瓶一杯分血が出ていたら—】

堀田 肇さん(米原市)

春照国民学校(現在の米原市立春照小学校)の教員だった堀田肇さんは徴兵され、所属する第 15 師団歩兵第 67 連隊がインパールへ向かいました。

最初に「日本が負けてしまうな」と思ったのは、サンジャックで夜襲をしたときでした。そこで(撤退した英国軍が残した) 缶詰やかドリング類など、いろんな物が見つかったんです。日本軍は、後ろから物を送ってこなかった(前線部隊への物資補給がなかった)ので、チャーチル給与(当時の英国チャーチル首相にちなみ、英国軍から奪った食糧のこと) ゆうて、それらを食べていたんです。その中に僕はびっくりしたのが、確かイワシの缶詰やったと思いますが、裏を見るとメードインオーストラリアと書いてあるんですね。あんな遠いところから、缶詰がイギリスに来ている。「これはもう、駄目やな。」と、思いましたわ。

4 月 3 日、私たちの 10 中隊と 11 中隊が「インパールに一番乗りをやろう」ということで、(インパール手前) の山(の英国軍陣地) へ夜襲をかけたんです。ところが二重にも三重にも防御されててね、弾がくるだけやなしに、地雷はあるし、なんやかんやらで、中隊で 80 人以上亡くなったんです。制空権をとられてたんで、昼は飛行機は来ますし、砲弾は来るし、それで「退却せよ」という命令を受けて、3524(後方の陣地) へ帰ったんです。

初めのうちは(陣地の周りに木々が) 鬱蒼としてよかったんですけども、ホーカーハリケーンというイギリスの双胴双発の飛行機でやられて。爆弾で樹

木が飛びますからね。隠れ場所が無くなると、砲撃しやすいですね。

それだけやなしに、向こうはごっつい戦車を持ってね。ちょうど3524（陣地）は断崖みたいになってたんですが、毎日、戦車を中心に向こうの兵士が崖を崩しに来るんですよ。じりじりと近づいて来てあと40mぐらいまで戦車が来ました。「こんなになったら今日は玉砕やな」て、いってたのが、4月17日でした。最初は右腕と左太腿をやられたんですよ。砲弾が当たって、肉がそげたんです。それから、今度は右耳をやられてね。耳が聞こえんようになりますからね。右手手首もその時一緒にやられたんです。朝の9時ぐらいにやられて、ダンプで谷底の方へ下げられて、ほっぽなされてましたんです。

（あたりが）真っ暗になってから軍医が診てくれたんですけど、「堀田少尉、おまえな、もう、インク瓶一杯分血が出たら、それで終わりやったな」と、いわれました。血が出ますと暑いところでもね、ものすごく寒くなる。そして、震えてくるんです。



チャーチル給与

英国軍は、補給物資を空輸し、自軍に向けて、落下傘を付けて投下しました。目測を誤って、日本軍側へ落下したそうした食糧を兵士たちは『チャーチル給与』と呼びました。敵軍の補給物資が、兵士の生命の灯を繋いだのです。

『写真週報』（第323号、昭和19年5月31日、情報局発行）には戦場での実態を隠すように、敵の空中補給を『血迷って』と表現しています。



堀田 肇さんの寄せ書き日の丸



インパール作戦で破損した双眼鏡

堀田肇さんがインパール郊外での戦闘で負傷した時に、弾を受けて破損した双眼鏡です。レンズなど破損した部分は戦後、修理されていますが、本体（左下側）には当時の傷が残っています。



白兵戦で戦う日本軍の兵士たち（『大東亜戦争報道写真録』昭和17年12月8日、読賣新聞社発行）

【体験談—降りやまない雨の中で—】

西田 久吉さん (竜王町)

西田久吉さんは、160人の部隊の中隊長としてインパール作戦を戦いました。

(インパール周辺は) ほんま天気の日が減多にないんですわ。そらもう、雨がよう降りますんや。そんで、服着替えることがでけへなんだ。濡れたら濡れたままでしょ。ドロドロになってね。そらほんまにどんな苦勞したや分かりません。大体、日本から食糧も来なんだ。

あそこ(インパール周辺の山間部)はヘビが多いんですわ。だからヘビを食ってた。だけど、火つけたらいつべんに目立って、敵に狙い撃ちされるからね。ヘビ、皮むいてそのままですわ。もう焼かずにバリバリ食ってた。

ほんで部下に「ヘビ食べ!ヘビ食べ!!」て。でも、食べなんだ人は「嫌なら食べな。おまえ、ほのかわり死ぬぞ」て、いってたら、ほんまに目の前で死んでまいよった。「おい、またそこに寝とるやつ、おい、起こしてやれ」っていうと、「いや、もう死んでますよ」って、そんなんでした。

終戦の時分には(160人いた部下が)もう6人ほどしか生き残ってなかったんですわ。あと全部やられて全滅ですわ。



ビルマの大道芸人(ヘビ使い) (『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行)



【体験談—斬り込み隊の報酬—】

森野 三郎さん (栗東市)

第15師団歩兵第67連隊通信隊に所属した森野三郎さんが、インパール付近の日本軍陣地にいた時の話です。

インパールのネオンサインの明かりが見えるという所まで行ったけど、日本には飛行機がなかった。タンクも1台も見たことがない。大砲もなかった。敵と何十層倍という兵力差があったから、我々は明るい時には草被って隠れ、日が暮れると、斬り込み隊で敵の陣地へ行って白兵戦をしたんや。

僕も斬り込み隊に志願したことがあった。志願すると師団長給与(将軍と同じ給与)がもらえたから。給与は1食分の乾パンと金平糖。それが1袋当たったんや。任務は敵の陣地に入って、手榴弾を投げて、敵の兵器や書類やらを取ってきて、もちろん糧秣(食糧)も取ってきて、ということやったが、そこまではせんかった。何故かという、したら確実に死んでる。

敵は地雷の後ろに陣地を作ってた。ジャングルで蔓の中に縫い込んだピアノ線に引っかかると地雷が発火する。長い竹の弾力で蔓をよけながら。「これは危ない、止めとこ」そういうことを見ながら、敵陣地へ接近する。歩哨の後頭部をばーんと殴る。さーと逃げ帰って、昼間に「時間と敵の情勢、弾の方向、陣地の絵」などの報告を書いて、連隊長に見せてた。カンパンが命つなぎやった。体重が81kgあったのに、栄養失調で39kgになったんや。

時々、ダグラスという連合軍の輸送機が、(英国軍へ向けて)糧秣(食糧)を落とすよった。乾パンやらコンビーフやら、肉の缶詰やら、魚やサラダも。友軍の糧秣だから連合軍は直ぐに、それを取りに来る。ところが、日本軍は食糧がないから、取り合いで殺し合いになったんや。

糧秣の補給が途絶えた時の生きる智慧の一つ。赤土の泥の中に塩気がある。それを剣の刃やら鉄兜で掘って、その泥を飯盒に入れて、それに谷間の水やら象の足跡に溜まっている雨水とジャングル野草を入れる。泥が下に溜まって、上が塩水。人間で怖いもんでね、力がなくなって、目がとろんとしても、泥の塩水を飲んだらしゃんとする。眼光も蘇生して

くる。草と水とで死闘が繰り返されるありさまやった。

退却の時には、日本軍仲間にも警戒しなあかんかった。死んだ顔してても、銃の引き金に指をかけて待っとるんや。それで、近づいたら殺される。歩いてる兵を殺して、バナナを取って、腹を満たしたい。敵ばかりでなく、味方も監視しながら。それが、負け戦の惨状やった。



インパールで敵陣地への斬り込みを行った兵士たち（『読賣ニュース焼付版』昭和19年7月26日、読賣新聞社発行）

第3節 食料が前線に届かなかった理由

インパール作戦で多数の餓死者を出したビルマの日本陸軍は、前線に食料を送る余裕もないほど、食糧事情が厳しかったのでしょうか？

現在のミャンマー（当時のビルマ）は世界第7位の米生産国です。豊富な雨水と熱帯の日照、イラワジ河などの大河が形成した肥沃な平野など、稲作に適したビルマは、その当時でも年間600万トンもの米を生産し、そのうち350万トンインドなどへ輸出できる一大穀倉地帯だったそうです。また、軍の倉庫には「英国軍が残していった大量の食糧や医薬品があった」との証言もあり、欠乏とはほど遠い状況であったと考えられます。

ではなぜ、前線に食糧が届かなかったのでしょうか？

原因の1つに、陸軍の兵站システム（戦場への物資輸送体制）の問題が挙げられます。ビルマでの物資輸送には、一部にトラックなども使われましたが、山間部など道路が整備されていない地域では、人力や牛車などで運搬していたため、思うように大量の

物資を運べなかったのです。その上、制空権をもつ連合軍の爆撃などによって、鉄道や橋などの交通インフラが各所で破壊されたため、輸送にはより多くの労力と時間が必要となりました。



「快調 インド進撃 インパールへ！！」

『写真週報』第317号（昭和19年4月19日、情報局発行）では、自動車などを分解し、インパールへ向けて人の手で運ぶ兵士たちを紹介しています。政府広報誌の意図に反して、インパールへの輸送の困難さを示す写真といえます。

【体験談—うず高く積まれた白米や医薬品—】

Hさん（大津市）

Hさんは輜重隊（物資輸送部隊）に所属し、昭和20年（1945年）3月までの約1年間、ビルマ中部の都市マンダレーの軍倉庫で勤務されていました。

ビルマの軍倉庫に行ったのはわしらの小隊だけやった。イギリスが蓄えとったのか、ごっつい倉庫でドンゴロスに入った白米でザーと積んであったんや。倉庫はごっついで、たいていのもんが入とって、仕事も色々分かるとったんや。わしらの班は馬やらなんやかやの薬だけを扱う獣医やった。

医療課へ行くと、前にいた将校のおじさんが言ってたなあ。「ここは兵隊の病気の薬ばっかし、薬だけの為にある学校の1校舎ほどの倉庫があるんや」て。ごっつかつたで。数も多かつたけど、ええ薬が揃とったなあ。

昭和20年（1945年）になると、イギリス軍が糧秣（食糧）を目がけて爆撃を始めよったんや。ほんで、あっちこっちの糧秣を爆撃されて、最後にわしらが寝ていた校舎も潰されたんや。



戦時中のビルマの米穀生産

「年産六百万トン お米の国ビルマ」

（『写真週報』第266号、昭和18年4月7日、情報局発行）

「煙草も餓頭も自給自足でビルマの貨物廠」

（『写真週報』第253号、昭和18年1月6日、情報局発行）

【体験談—鉄橋のそばで腐った米—】

近藤 俊三さん（長浜市）

郵便局長をされていた近藤俊三さんは徴兵され、昭和19年（1944年）にビルマの独立混成第29旅団通信隊に配属されました。

私らは、タイのバンコクに1年ほどいて、泰緬鉄道沿線のカンチャナブリーへ移りました。後方の支援部隊でしたから、ビルマへ食べ物を送ってたんです。そこでは割合、食べ物がよかったですね。肉類・魚類もありましてね。

でも、あっち（ビルマ）へは送れなんなんですわ。泰緬鉄道から送ってたんですけど、空襲で鉄橋が爆破されてね。こっち（タイ国）から送るズタ袋に入った米が爆破された鉄橋の沿線に野積みになってあってね。雨が降ると発酵して、送れなんだ。

鉄橋を爆破しよるさかい、泰緬鉄道だけではいかないので、ジャングルを切り開いてビルマへ入る道をつけてやな。ほれ（食糧）を英国兵やオランダ兵、豪州兵（オーストラリア兵）の捕虜に負わして、尻叩いて運んだもんです。鶏は籠の中へ入れて、担がして、牛は生きてまま尻追うて、運びました。

ところが敵さんら（捕虜たち）は肉食でしたやろ。晩にそれ（運んでいた動物）をちょっと失敬して、それが見つけられて、惨殺された光景を見ましたけどな。ほら、悲惨なものでしたわ。

【体験談—賽の河原の架橋作業—】

小川 常三さん（近江八幡市）

鉄道第7連隊第1大隊の小隊長をされていた小川常三さんは昭和19年（1944年）7月頃から、チンドウィン河東岸地区で前線から退却する部隊が通る道の架橋作業に従事しました。

チンドウィン河に山から沢山の川が流れてくるんです。そのいくつもの川に架かる橋がしょっちゅう爆撃で落とされるから、鉄道隊がそれを補修しに行ったわけです。仕事をしたのは、雨季の一番やりにくい時で、毎日、雨の中で仕事をしてました。夜も長い時間仕事してたけど、満足に食べれないから仕事が進まへんわね。

だいたいひと月ぐらいかかって橋ができますわ。で、あくる日に（爆撃で）落とされますわ。そしたらまた山へ木を切ってきて、象を使って重いチーク材の木を運んで、橋を造って。10日か15日で造りますわね。そしてまた（敵に）落とされる。また、造る。という仕事をしてた。そして、造って橋が出来上がるのは何月何日の夜何時に、例えば12時なら12時に全線に橋が開通しないと意味がない。開通とともに戦地へ行く人（部隊）と後方へ下がる人（部隊）が行ったり来たり（通行）して、あくる日、爆撃でまた橋は落とされる。そして、また橋を造る、そういう事をしとった。同じ所に4つぐらい橋をつくったかな。

（橋を造った場所は）砂地で橋脚の柱を立てるのが難しかったんや。それで、いちばん最初はやっぱり慣れんのでね、反り橋になってしもうた。「隊長、この橋、そらまあ渡れんことはないけどね。やっぱり反り橋は、あんまり戦場ではいらんな」いわれて。まあ、それからちゃんとした橋をつくったけど。

日本は飛行機がないから、向こうの飛行機が毎日のようにきた。向こうはボーハイターちゅう木製の飛行機でやってきて、1時間ほどうろろして、爆弾を落とすしていくんですわ。バタバタと直径50cmぐらいの丸い円筒の爆弾をボトボト落とすしていきます。しばらくしてから爆発する。橋をやったついでに僕らもバンバンと。そんな時は、逃げただけ逃げないやあない。でも完成近くになったら、夜はいい仕事はしない、また壊されるから。

(前線から) 部隊を組んで帰ってくる人は、ちゃんとしていましたけど、負けてバラバラと帰ってくる人たちは、軍隊ちゅう形になってなかったですね。なかには、僕たちのトラックを見てパタッと倒れる人もいましたね。(その人の服は) 服なんてというもんじゃないですね。もうボロボロでしたね。



破壊された鉄橋の横に仮橋を造る兵士たち (マンダレー周辺)
 (『写真週報』第220号、昭和17年5月13日、情報局発行)



象を使って重いチーク材を運搬
 (『写真週報』第300号、昭和18年12月8日、情報局発行)



戦時局は終戦 (昭和19年) (『戦争と平和』)

第4節 救援に向かった兵士たちの戦場

昭和19年(1944年)4月、インパール作戦に参加した兵士たちが危機的な状況を迎えるなか、第53師団の滋賀県出身兵士たちが、新たにビルマに到着しました。

その頃、ビルマとその周辺の戦場では、日本軍の各部隊が連合国軍の反撃を受け、窮地に陥っていました。日本軍は、新たに到着した師団を部隊ごとに分け、インパールやビルマ北部(フーコン谷地)、中国雲南地域(怒河西岸地区)の戦場などへの援軍として送りました。

小林育三郎さんたちが送られたミトキーナ鉄道沿線の戦場では、第17師団の救出には成功しましたが、連合国軍の南下を食い止められず、東野栄一さんたちが送られた中国雲南地域の戦場では、数で勝る中国軍の猛攻を受け、救援に向かった各部隊はマンダレー周辺まで撤退しました。

その後、第53師団はインパール周辺から撤退した部隊と合流し、イラワジ会戦・ミトキーナ会戦を戦いました。



戦場付近のミトキーナ鉄道の鉄橋 (戦後に撮影)

第53師団工兵第53連隊の副官を務めた清水慶治郎さんのアルバムより。左の図は写真に付けられていたメモ。

【体験談-メイクテラでの戦闘-】

小林 育三郎さん (守山市)

昭和20年(1945年)3月22日、小林育三郎さんの部隊(第53師団歩兵第119連隊第2大隊第2機関銃中隊)は、メイクテラ飛行場奪還のための戦闘に参加しました。

メイクテラ飛行場争奪戦で戦死しはった草津出身の青地中隊長は、新婚ほやほやで、いつも奥さんの写真をポケットに入れていて、みんなに見せてたんです。「どうや、ベッピンやろ」と自慢してはった。

奥さんから「男の子が生まれた」との便りが来てからは「ベッピンの子やから、坊やは男前やろ」といはったけど、戦死しはったんや。戦闘の最中でしたんで、大隊本部から「ただちに小林中尉は中隊長の位置につき、中隊を指揮せよ」との命令が届いたんです。私は部下1人を連れて、中隊長のいた場所へ移動しました。そしたら、5分ほど経って、敵戦車が来よった。ついさっきまでいた陣地を戦車砲で攻撃しよったんです。陣地に残した9名の部下がいっぺんに吹き飛んだんです。いまだにその時のことは忘れられませんわ。

【体験談—負傷—】

東野 栄一さん（長浜市）

中国雲南地域へ送られた第53師団（歩兵第119連隊第1大隊）に所属した東野栄一さんの芒市付近での戦闘中のできごとです。

夜の明けた時分やった。山の上で陣地を構えようと塹壕掘りやらやってる時に、弾が飛んできた。双眼鏡で見張られてたんやな。ほんで、両方の撃ち合いが始まって、1人やられ2人やられ、負傷した先輩を小屋に運んでたら、いっしょに運んでた先輩が腹を撃たれて亡くなった。もう、どうなってんのか、私ら初年兵やからわからへんかったけど、そんなことしてるうちに、私も迫撃砲弾で手と足をやられて…。

やられた時は、手やなんかは、焼け火箸をジュッと当てられたようなもんで、足なんかは血まみれになって。もう、血でドロドロになってしもて。暗闇の中で、みんな呻いとった。ほんで、いつのまにやら、山のくぼみとこの小さい小屋に収容してもらった。もう、15人かそこらはいたと思う。そのうち、意識がわからんようになってしもた…。

5〜6時間かかって兵站病院入った時には、傷にウジが湧いておりました。



兄の出征前に自宅前で（本人提供）

昭和18年秋、後列右側が東野栄一さん



中国雲南省怒河西岸地区での戦闘（『アサヒグラフ』69報、昭和18年4月28日、朝日新聞社発行）

ミトキーナ鉄道沿線の戦闘やメイクテラ会戦などに参加した峯森清夫さん（高島市）

第53師団歩兵第119連隊第2大隊に所属された峯森清夫さんは、ミトキーナ鉄道沿線での戦闘中にマラリアを発症され、野戦病院に入院されました。退院後、部隊に戻り、メイクテラ会戦などに参加されました。終戦後は、マラリアのため、再び入院を余儀なくされました。アーロン収容所での捕虜生活をおくられた後、昭和22年（1947年）7月に帰国されました。



上段：峯森清太郎さん関係資料

左から順に、引揚証明書、予防接種の証明書、

峯森清夫さんから父清太郎さんへの手紙、在隊経過録

下段：清水慶治郎さん関係資料

左上：問題集「秘 大河渡河」清水見習士官

右下：事実証明書、下段中央：千人針

右：清水慶治郎さんが使った第53師団工兵第53連隊の印鑑

(左：印鑑「安第一〇三〇部隊印」、

右：「工兵第五十三連隊副官士印」)



清水慶治郎さんの軍帽・軍服上衣・軍袴、長靴

第3章 戦地と感染症

第1節 兵士たちの生活習慣と感染症

感染症予防のために心がけたい生活習慣は、次の4つが挙げられます。

- 1) 早寝・早起きなど規則正しい生活
- 2) 偏食を避け、栄養バランスのとれた適量の食事
- 3) 手洗い、うがい、入浴などで身体を清潔に保つこと
- 4) 適度な休息を取り、過労にならないこと

また、感染した場合には、重症化しないよう『早期に医療機関に受診し、治療すること』も大切です。

残念ながら、ビルマでの兵士たちの生活は、健康的な生活習慣とはほど遠いものでした。兵士たちは、空襲を避けるため、昼夜が逆転した生活を強いられ、昼間の就寝中も敵からの攻撃があれば叩き起こされるストレス満載の不規則な生活だったのです。

慢性的な物資不足に陥っていた前線では、食糧調達は、主に住民からの徴発や各自が採取した野草や魚などに頼っていました。そのため、兵士たちは栄養の質・量とも不足がちだったのです。

戦場では長期間、入浴できないことも多く、兵士たちの衣服や寝具はシラミやダニの温床となりました。

さらに、感染症を発症した場合でも、軍医の診断や上官の命令が無ければ、治療のために部隊を離れることは許されませんでした。このことも、病状の悪化や部隊内での感染拡大の原因となりました。

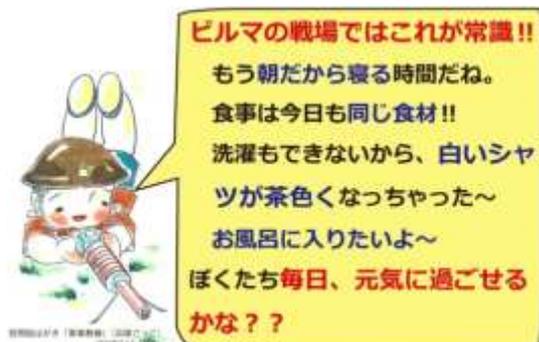
【体験談—夜が逆転した軍隊生活—】

Hさん（大津市）

ビルマを転戦した第53師団歩兵第119連隊でのHさんの毎日の生活です。

当時は戦闘をするより、毎日がもう食べること、食べるもの探しが私らの仕事みたいなもんやった。ご飯炊きやらは煙が出ますやろ。で、夕方、陽が落ちて飛行機から見えにくくなってから、あくる日の1日分のご飯を炊きよりますねん。始めのうちは副食に缶詰なんかもちよっと来ました（補給された）けど、それから後は全然というほど、副食物は来ませんでした。お米は味ない現地の米ですわ。ほんで、お塩をかけて食べるが多かったね。毎日、夕方

ご飯を炊いて食べて、行軍ですわ。ほして、次の地点まで行って、朝になると敵の飛行機が来まっさかいに、ちょっとした木があるところ、その陰に砲（大砲）をかくして、夕方までウトウトしてる。夕方からが我々の仕事ですわねん。



【体験談—劣悪な労働環境—】

小川 常三さん（近江八幡市）

毎日のように降る雨のなか、鉄道第7連隊の小川常三さんはインパールからの撤退路の架橋工事を行っていました。

兵舎は、蚊帳が吊っているだけだったね。蚊帳の上にむしろを敷いて、雨は落ちないんだけど。寝るのも、飯食うのもそこだから。お風呂はね、たまにドラム缶のお風呂に入っても、結局また濡れたもん着るでしょう。だから、もうシラミがいっぱい湧いてすごかった。

1日3回食べてたけど、もうみんなフラフラやった。だいたい、米は食うたことない。輸送がきく紫色の玉ねぎだけしかなかったね。それも沢山あるわけではないから、塩で炊いた玉ねぎの味噌汁みたいなものとか、それを焼いたりしながら食べとった。けども、それ以外何も食べ物もないから、仕事してもヘトヘトやった。あんなところで戦争するもんじやない。

故国の香り

「おい、ヤシの皮なんか入れてなんだい」「内地（日本）のゆず湯を味わっているんだよ」（『アサヒグラフ』56報、昭和18年1月27日、朝日新聞社発行）

戦場では、お風呂もドラム缶に水を入れて湧かしたドラム缶風呂でした。毎日入浴できないことも多かった兵士たちが、順番に使ったあのお湯は、どんな色だったのでしょうか？

【体験談—負傷して運ばれた病院では—】

堀田 肇さん（米原市）

大槻 正次郎さん（湖南省）

昭和19年（1944年）6月5日、堀田肇さんは前線の兵站病院からマンダレー第121兵站患者療養所に送られました。

マンダレーまで来ると日本の看護婦さんがおりましたですね。そこでも注射も飲む薬も全然なかったんです。野戦ほどではないけども、（ガーゼなどの取り替えも）毎日替えてもらえない。1日置きぐらいでしたね。そこで、ドラム缶の風呂に初めて入れてもらったのを覚えています。（堀田肇さん）

大槻正次郎さんたちが所属する第53師団搜索第53連隊は、中国雲南地域の龍陵を超えて拉孟を目指しました。

（拉孟付近での戦闘中）足のかかとをやられてね。弾が足の裏で止まってしもうて、歩けなかった。衛生兵と二人で、敵の陣地の前に壕掘って、一晚待ってたんですわ。明くる日におんぶしてもらって病院にいったんです。

第2野戦病院は前線やから、衛生兵が10人ほどおるぐらいで屋根も何にもない。飯一つ食べられないし、ほしてもう、すぐですわ。一日したら、撃たれた傷口からウジがどンドンどンドンこっから出てきよんねん。そんなんが皆、手当てしてもらえんと、寝転がってるんですよ。

そら、とにかくもうハエは多かった。戦死した人が道端に転がってますわな。通ったらたかっているハエがブーンと上がりよるから、すぐに分かるんです。顔がハエで見えへんぐらいとまってきましたよ。

（治療のために運ばれたメイミョウ兵站病院でも、）薬もあんまりないんで、麻酔の注射打たずに即その場で切って、弾を抜いてくれましたわ。

（大槻正次郎さん）



野戦病院と衛生兵たち（個人提供）



ポスター『慰問袋に必ずイマツ蠅取粉』（個人提供）



兵士への慰問品の『蚊取り粉』

第2節 『ビルマ戦場日記』にみる感染症

小林育三郎さんは、昭和19年（1944年）、第53師団歩兵第119連隊第2大隊第2機関銃中隊の小隊長（メイクテラ会戦以降、中隊長に昇進）として、ビルマへ渡りました。

小林育三郎さんは、部隊が日本から出航した昭和19年（1944年）3月27日から捕虜として収容所へ向かう前日の昭和20年（1945年）8月28日まで、約1年5ヶ月に渡って戦場での日々の出来事を日記に書き留めました。戦後、小林育三郎さんが日記をもとに出版された『ビルマ戦場日記』（昭和56年発行）には、戦争の記録だけでなく、部隊の関係者・本人の病気や、日々の食べ物、感じた想いなど、ビルマの戦場での生活が克明に記されています。

戦闘に明け暮れた約1年5ヶ月間のうち、小林育三郎さんはマラリアによる発熱など、延べ60日前後も様々な病気の発症に苦しみました。その上、入院した病院も戦況悪化により、治療途中で退院を余儀なくされ、再び戦場へと戻られました。

発症した病気は、マラリア（発熱・約45日）や Dengue熱（5日）、下痢（数日）、熱中症（1日）に及びます。また、重症の脚気やタムシも長期間、苦しめられたようです。

小林育三郎さんにとって、命を危険にさらしながら過ごしたビルマの戦場は、病気との戦いの場でもありました。



戦場の機関銃部隊（『アサヒグラフ』69報、昭和18年4月28日、朝日新聞社発行）

【体験者手記ービルマで最初にかかった感染症ー】

（小林育三郎さんの『ビルマ戦場日記』より）

第53師団の小林育三郎さんの部隊は、首都ラングーンから戦場に向けて列車で出発しました。列車に

乗って早くも3日目、小林さんはデング熱を発症しました。デング熱に苦しむ小林さんの様子です。

昭和19年5月19日 ピュウ

※ピュウ・エダシェ・スワはビルマ南部の鉄道沿線の地名

—前略— 七時カニクイン出発。欠伸が出る。吐気を催す。さてはデング熱か。デング熱では先輩の兵が「小隊長殿のは間違いなしデング熱」と診断を下す。悪寒全身を這う。毛布を被ってもガタガタ。到頭デング熱が出やがった。—昨日ずぶぬれの搭載（機材搬入）、一昨晚の貨車で困憊。そこへつけこんで出やがったか。三十九度六分ある。二時間ほどの間にこうも急に発熱するものか。

ピュウという駅の手前シッタン河に架かる鉄橋が爆破されて不通。この間を糧秣等牛車で運搬する事となる。すべてを頼んでふらふらと患者の位置、口の中が苦くてカッカッする。検温四十度一分、こんな発熱覚えなし。割れるように頭が痛い。部隊炊事を幸いに兵がお粥を炊いてくれるが苦いだけ、但しマンゴーは美味しい。

小林育三郎さんのデング熱は比較的軽症だったようで、一度平熱まで下がって、調子に乗ったのが楽り、4日目には再び、39度の発熱に苦しみました。

5月23日 エダシェ

昨日平熱調子よかったので食べたわ、はしゃいだわの天罰観面、今日は三十九度一分、一日中うんうん。

明早朝出発ときまって夕方より材料の搭載開始、それなのに一日中熱こうなされる。中隊長から「わけのわからん事ばかり言うとなつたぞ」歌も唱っていたらしい。デング熱2回目のえらい日。

5月20日 スワ

5時前起床、昨夜宵の内は苦しかったが夜中は楽になる、裁判所あとの病室ともお別れ。患者用の貨車でエダシェ出発。約四十分で爆破鉄橋の手前着、下車、線路に腰かけて朝食、検温三十六度八分あゝ有難や。もう熱発せんといってくれと手を合わせて拝みたい気分。—中略— 熱は平熱腕や足に発疹が出てきたデング熱の治る時の徴候だ。食欲も旺盛、マンゴー食いかけると一つでやめられぬ。



日本軍が使用した機関銃（『日生台演習場 絵はがき』）

上：軽機関銃、下：重機関銃

【体験者手記—ジャングルで襲って来る蚊と敵機—】（小林育三郎さんの『ビルマ戦場日記』より）第53師団の小林育三郎さんの部隊は、戦場となったミトキーナ鉄道沿線のジャングルで英国軍と対峙します。予防薬や十分な防蚊装備を渡されず、ジャングルに潜んだ兵士たちに、マラリア感染源の蚊と敵機が容赦なく襲いかかりました。

6月25日 ピンドウ

※ピンドウはミトキーナ鉄道沿線にあるビルマ北部の地名

ジャングルの中、もの凄い蚊。昼間は敵機、夜は蚊で、四六時中ぶうんという音、耳からはなれず。

夜が白んでくる。いやな雨だ。天幕の間からポタポタと雫がたれる。雨が降れば敵機は飛ぶまいと思うのに朝早くからやってくる。状況は全然判らず、出発の命令を待って一日中ジャングルでごろり。

—中略—

今度、我々の部隊に配属される荒川はいう。「我々の四周を敵に包囲されて、敵情極めて緊迫だ」と、いよいよ命日夕（方）に迫るか。37（部隊か？）は戦死傷者続出で全滅とか。—後略—

6月26日 ピンドウ

夜中二度三度起き出しては防蚊の措置。靴下の上から刺されるので巻脚絆(ゲートル着用)。防雨外套の頭布の上から覆面それでも刺されるもの凄い蚊。
—中略—

一日二食の腹は午後になるとたまらなく減ってくる。24時の夕食まであと8時間、7時間と待つつらさ。21時半、地上は恐らく暗かろうに爆音。飯ごう炊さんを狙ってくるのか。本沢分隊長アメーバ赤痢の疑い。困ったことになる。

【体験者手記—将校は感染症でも休めない—】

(小林育三郎さんの『ビルマ戦場日記』より)

第53師団の小林育三郎さんは戦場で、部下たちがマラリアやアメーバ赤痢で倒れるなか、自らもマラリアを発症しました。発熱してふらふらの状態のなか、上官からの呼び出しや輸送用の牛の徴発など、雑多な業務が次々と舞い込み、十分な休息も取れませんでした。

7月14日 サーモー

※サーモー・ポンホンとはビルマ北部の地名
熱発(発熱)か、体が熱くてたまらぬ。こんな時に連隊本部から呼び出し。地獄からのお迎え。代わりに谷口をやったら「将校を呼んだのに下士官では駄目だ」と帰ってくる。—中略— 高橋小隊が苦戦で緊急出勤となる。発熱(発熱状態)とはいえ小隊長が臥床(寝込んでいる時に)、部下を第一線へ行かせて、すまぬすまぬの気持ちでいっぱい。
—以下省略—

5日間発熱し続けた小林さんは、7月18日には「熱発といつまでも甘えておれぬ、明晩は敵陣に乗り込まねば」と意気込みますが、アメーバ赤痢と脚気を発症した中隊長や、マラリアを発症した兵士たちが次々と後方の病院へ入院していくなか、本人も再び発熱します。

7月25日 サーモー

受診、吉田が陣地から下がってきたので結局4人。診察してくれても薬はなし。マラリア予防薬を一日5粒服めというが、あとの補充がないので惜しいし、下痢の薬は炊事のあとの炭の粉。島崎軍医が親切に診て下さるのがありがたい。また、土砂降りの雨。

雨やどりしても晴れず。雨の中ぬれて帰る。 —以下省略—

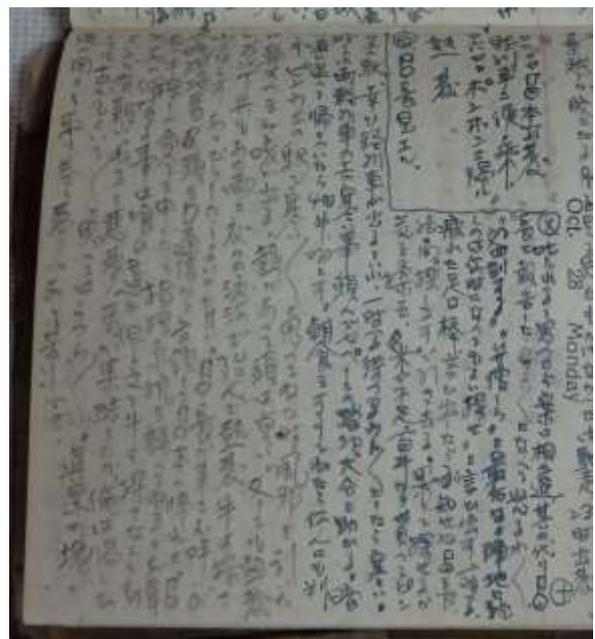
10月28日 ポンホン

(午前) 二時連隊本部出発、—中略— 幸い軽列車が出るという。 —中略— 暗い道に迷って帰着いたら(午前) 四時半。心底吻とする。

朝食をすまして寝る。風邪をひいたか鼻は詰まって咳が出る。熱があつて頭は重い。下士官兵もあの雨と度々の渡河で殆ど熱発。(小林さんも翌日からマラリアで発熱していました。)牛は探さねばならず、ああどうしたものか。

大隊長が来てお呼び。今晚、現地馬八頭を師団通信(隊)から受領して大隊本部へ帰れと。連隊長の牛探しの命令を申し出たら「指揮系統を間違っている」お偉方二人の仰ることが喰い違い。しかし、これで牛を探さなくともよし。有難い。

寝ても馬が気になる。しかし、悪寒と悪夢。真黒の塊が俺をとり巻く夢。ああ苦しい。



小林育三郎さんの日記(昭和19年10月28日部分)



ビルマの牛車（『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行）

牛はビルマの人々にとって、農耕など日々の生活のために必要なものでした。日本軍は荷物の運搬や食料とするため、多くの牛を半強制的に集めました。

【体験者手記—とても汚かった兵站病院—】

（小林育三郎さんの『ビルマ戦場日記』より）

昭和19年（1944年）10月30日、マラリアの発症後も戦闘と業務に追われていた小林育三郎さんは、診察の結果、入院して治療することを命じられて兵站病院へ向かいました。そこで目にした病院は、大量の患者に対応できず、医療崩壊を起こしていました。

11月22日 サガイン

※サガイン・マンダレーはビルマ中部の主要都市

—前略— 病院、樹の下で露営している患者の多いのに驚く。いかに満員とはいえ此の夜寒、普通の者でもこたえるのに患者をこんなにして、入院させた兵が死んで逝くのも当然だ。怒りがこみあげる。
—中略— （病院内の様子）下痢患者の汚いこと、糞をはずして砂まみれ、至るところ野糞。何処へ入れてくれるのか。道の側、暑い陽差しの中、トラックの砂ぼこりを浴びて待つ。
—中略— 夕方になってやっと一緒に退った将校四名、病棟へ案内してくれる。病室とは名のみ。パゴダ（仏塔）の煉瓦の上、アンペラ（ムシロ）の床。
—後略—

11月23日 サガイン

シラミ、しらみ、虱に攻められて、しかも暑いし、その上に桂（同室の病人）の歯ざしりにまんじりともせず。
—後略—

サガイン兵站病院の汚さと病室の姿に憤慨した小

林育三郎さんでしたが、その後、更に大きいマンダレーの病院へ転院することとなりました。そこで目にした病院の姿は…

11月29日 —前略— （夕方）病院についても病棟へ入れてくれず、樹の下で夕食、暗くなる。第一印象悪し。待ち切れず永野と強引に入ったらコンクリートの上に藁の病床。馬扱いだ。
—後略—

11月30日 マンダレー

朝起きてみて病院の汚いのにびっくり。舎後（建物の裏手）には残飯の山、便所は氾濫で到るところに立小便。こんな病院ではますます悪くなる。
—後略—

12月2日 マンダレー

今日も我々、診察してくれないし、薬もくれず。全くひどい。衛生隊の田附中尉が将校（が）結束して事故（自己）退院しようと息まいている。俺も此の仲間入りを頼む。
—後略—

12月3日 マンダレー

入院五日目初めて診察を受ける。診療主任の中尉は滋賀県庁にいたという人。型の如く診る（形式的にサッと診察する）だけ。
—後略—



小林育三郎さん手書きのビルマ地図



小林育三郎さん関係資料

ビルマでは、衣服や生活物資などの補給がまったく来なかったそうです。継ぎはぎだらけの軍服やシャツは、滋賀県で支給されたものだそうで、破れ目を自分で縫いながら使っていたそうです。特に、日記を書くための鉛筆を確保することに大変、苦慮されたそうです。

左奥：略帽・略衣・軍袴、肌着、トランク

小林育三郎さんが戦地で着ていた衣服や服などを入れていたトランク

左手前ケース：水筒、将校用飯ごう、小鉢、コップ

右手前ケース：『ビルマ戦場日記』

小林育三郎さんは、ビルマの戦場での日々のできごとを日記に書き留めました。この日記は終戦後、部隊が収容所へ送られる際、没収を避けるため、土に埋めたそうです。日記は戦後、『ビルマ戦場日記』として出版されました。



小林育三郎さんの収容所生活

(左から日記(昭和20年8月29日～年末)、弁当箱、碁石(白・黒)・碁盤)

終戦後、小林育三郎さんたちはビルマ南部のアーロン収容所へ捕虜として収容され、強制労働に従事させられました。碁盤や碁石はそこでの労働の合間に手作りしたもので、「早く日本へ帰りたい」と思いながら仲間と楽しんだとのこと。筆まめな小林さんは戦場だけでなく、収容所でも日記を書かれています。

弁当箱は戦争中に英軍がパラシュートで投下した補給物資の空缶を使って自作したものです。

第3節 日本軍の感染症対策

1. 日本軍のマラリア対策

日本軍は戦争が始まる前から、南方進出の障害となるマラリアの研究を行い、対処方針を定めました。それは、米軍が新たに開発した強力な殺虫剤(DDT)の広範囲散布で病原体を媒介する蚊(ハマダラカ)を根絶することで、マラリアを制圧できたのに対し、『感染者の根絶や隔離』、『ハマダラ蚊の根絶』といった抜本的な対策を『戦時においては実行困難』として行わず、兵士に流行地域でのマラリア予防薬(キニーネ薬など)の服用や、蚊に刺されないための防蚊装備の使用を命じるものでした。

防蚊装備には、就寝場所への蚊の侵入を防ぐ蚊帳や頭部を覆う防蚊帽、手を守る防蚊手袋などがあります。こうした装備は、蚊が媒介するマラリアやデング熱の感染防止に一定の効果がありましたが、蚊の吸血を完全に防ぐものではなく、病気の蔓延をくい止めることはできませんでした。

マラリア防止薬(キニーネ薬)は、ジャワで大部分が生産される植物『キナ』を原料としていました。戦況悪化により、その供給が途絶えた結果、ビルマを含めた南方各地の戦場では、極めて多くの兵士がマラリアに感染して命を落としました。



マラリア原虫を媒介するハマダラカ (CDC 提供)



デング熱の病原体のデングウイルスを運ぶヒトスジシマカ(ヤブ蚊) (CDC 提供)



パタゴ（仏塔）と兵士（『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行）

2. アメーバ赤痢などへの対策

朝比奈章次さんの命を救った戦友と水筒

朝比奈章次さんは、ビルマの戦場でマラリアを発症した際に「重い荷物を戦友が背負ってくれたため、生還できた」と語られています。

「生水を飲むな」と命令されていた朝比奈さんたちは、川の水や雨水を沸騰させてから、水筒に入れて飲んでいました。朝比奈章次さんにとって、この水筒はもう一人の戦友だったと語られています。



朝比奈章次さんの水筒



朝比奈章次さん（個人提供）



防蚊装備をつけて警備する兵士

顔や頭を守る防蚊覆面、手や手首を守る防蚊手袋

ビルマなどの南方地域の日本軍兵士が警備や部隊移動の際に、蚊の吸血から身体を守るために装着したものです。

鉄帽、上衣、防暑略衣袴、地下足袋、ゲートル、雑のう、三八式歩兵銃、毛布、一人用蚊帳

蚊帳は、就寝時に蚊に刺されることを防ぐため、日本で古くから使われてきた寝具です。麻など通気性の良い布で作られ、内部に蚊が入らないようにする道具です。展示品は、実際に戦地で使われたかは不明ですが、大きさから一人用の蚊帳と考えられます。

日本ではほとんどみることができなくなった蚊帳ですが、マラリア流行地域では殺虫成分をもつ布で作られた日本製の蚊帳が感染症対策の切り札として、現在も使われています。



戦地で使った感染症関係の参考書（左から順に、医学書『マラリア』、『衛生兵必携』、『衛生法及救急法』、『陸軍衛生全書』）
軍医や衛生兵などが兵士の治療や処置をする際に参考にした日本軍の衛生関係の書物です。

一戦場となったビルマの人々



間違いさがし『ペゲー大仏』

左:裸足で礼拝するビルマの人たち

(『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行)

右:軍靴をはいている日本軍兵士たち

(『写真週報』第214号、昭和17年4月1日、情報局発行)
 敬虔な仏教徒が多いビルマでは、石敷きの仏殿に入堂する際も、靴を脱ぐことがエチケットです。
 ペゲー大仏に参ったビルマの人たちが素足なのに対して、ビルマの風習を知らなかった兵士たちは靴をはいたまま見学しています。ビルマの風習を無視した兵士たちの行動も人々の反感を買うこととなりました。



軍事用道路(ビルマ〜タイ間)の建設に動員されたビルマの人々(『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行)



ビルマの子どもたち(『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行)



働く子どもたち(『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行)



家族の食事を作る女性たち(『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行)

【体験談—今も消えないビルマの人々への思い】

Hさん(大津市)

ビルマ各地を転戦したHさんが、戦後も持ち続けたビルマの人々への思いです。

食べるもんがあらへんさけい、野菜や野草探したりして、ちょっとしたおかずを作ったりしてた。けど、私は百姓をやってましたでしょ。現地のもんを

もらうのが、なあ〜。気張って作っときよんのを、盗むんやから、「悪いなあ」としてなあ。「悪いことするなあ」という思いがあって、もう〜。

大きい部落もありましたけど、戦闘が激しくなってきたら、みんな逃げて行って、もう誰あれもいやらしません。子豚やら鶏やらがおると、拳銃で撃って、みんなで分配したりね。ときには牛を黙って盗むんです。そうして、牛一匹、殺生すると、長いこと食料の補給ができません。そんなことで、私らはほんまに頭がぼけてもて、家のことも忘れてしまっていましたわ。

たいがい野宿でしたけど、町の民家を借りて、寝泊まりしたこともありましたが、そこで空襲にあって、ビルマ人のお爺さんが戦死されました。ほしたら、明るる日、娘さんが私らに抗議してはるんです。「あんたらのためにお爺さん、死なはった」と。抗議してはるんやろうと思うんやわ。何を言うてはるのか、言葉はわからんのやけど、なんやまくし立ててはったから。

我々は一応、お国のためやと思て戦こうてんねんから、どんなことがあってもしょうがないけど、現地のお方の食べもんを取ったり、戦死させたり、一番迷惑なのはビルマの現地のお方やなあ、と、それだけはもう頭がぼけてても心に残ってましたなあ。

今でもビルマのお方には「畑のものを盗ったり、鶏を盗んだりしたこと、すまんかったなあ」と思てる。それが、わたしの一番のあれやなあ。



ビルマの食卓（『写真報道記ビルマ』第214号、昭和18年9月、朝日新聞社発行）

第4章 兵士を襲った感染症

第1節 日本軍の3密



日本軍の3密（感染を広げた日本軍の行動）

ーシラミによる感染症ー

戦地の兵士たちは、入浴や衣服・寝具の洗濯などが長期間できないことも多く、衣服や髪に住み着いたノミやシラミ、ダニなどの吸血による激しいかゆみに悩まされました。

さらに、シラミやダニは発疹チフスや回帰熱などの恐ろしい細菌を人に感染させます。ビルマの戦場では大きな被害は確認されていませんが、中国の戦場や戦後の満州などからの引揚げでは、シラミから感染した発疹チフスや回帰熱で多数の兵士や民間人が亡くなっています。

第2節 兵士を襲った感染症

ビルマでは、マラリアやデング熱、アメーバ赤痢、チフス（パラチフス・腸チフス）、破傷風などの感染症が兵士たちに蔓延しました。特に、マラリアとアメーバ赤痢で多数の兵士が命を失いました。

マラリアは、蚊（ハマダラカ）が人の血を吸うことによって感染する病気です。発症すると周期的な高熱に襲われ、死に至ることもあります。ビルマでは、蚊の生息地の熱帯ジャングルが戦場であったことや、蚊が多く発生する雨期（5月～10月）にも戦闘が継続したこと、空襲を避けて行われた部隊行動

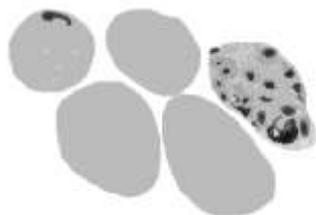
が、蚊の活発に活動する時間帯（夕暮れ～明け方）であったことなどから、極めて多くの兵士がマラリアにかかりました。

南方の戦場では、兵士たちにアメーバ赤痢やチフス、細菌性赤痢などの消化器系の感染症が蔓延しました。これらの病気は、感染者の便や尿に汚染された生水や加熱が不十分な食べ物を飲食することによって感染します。ビルマの戦場では、部隊の位置を敵に察知されないよう、煙が出る日中の炊飯や飲み水の煮沸が行えないことも多く、のどの乾きを癒すために仕方なく飲んだ生水が感染源となりました。

1. マラリア malaria

マラリア原虫に寄生された蚊（ハマダラカ属）に刺されることで感染する病気です。1～4週間ほどの潜伏期間のあと、40度近くの高熱や悪寒などに繰り返し襲われます。脳症や腎症などを併発して死亡することもあります。

毎年、世界中で約2億2千万人が感染し、推計43万5千人が死亡（2018年11月公表の統計資料）しています。



熱帯熱マラリア原虫の輪状体と分裂体【イメージ図】

【予防方法】

最も効果的な方法は、ハマダラカに刺されないことです。虫よけスプレーや感染防止の予防薬もありますが、服用していても感染する場合があります。マラリアが流行する地域では、蚊が活発に活動する時間帯（夕暮れから明け方）の外出をさげ、できる限り肌の露出を少なくしましょう。

【治療方法】

抗マラリア薬で治療することができます。（参考文献：厚生労働省検疫所ホームページ）

【体験談—マラリアを発症—】

小川 常三さん（近江八幡市）・Hさん（大津市）
小川常三さんは、味方の撤退路を確保するため、必

死に働いていた時にマラリアを発病しました。

（ビルマに送られた時に通った）泰緬鉄道の（そばの川は）もの凄く綺麗な川なんだけども、そこにおる蚊にやられたらアカンかったんよ。その蚊はマラリアに罹っている（マラリア原虫に寄生されていた）わけや。その知識がなかった。とにかくみんなマラリアになって、それから、いわゆるアメーバ赤痢があった。

昭和19年（1944年）8月末頃に、（チンドウィン河支流の架橋工事の）仕事をしている時にバタンといったんや。ビルマのマラリアは大陸熱というやつでね。ずうっと熱が出て、1週間続くんですよ。体温からうんと上がって、熱が39度ぐらいかになって、人によっては頭があかんよう（脳症を発症）になるんです。

マラリアで倒れて、入院したから今生きとんねん。うちの部隊は僕が入院してまなしにもっと北（のミイトキーナ鉄道）の方へ全部まわっていったんや。第1小隊長だった俺の代わりに、第4小隊長の小原少尉が死んだんや。爆撃機の爆弾で小原隊の人たちも十何人も死んだ。それは僕が倒れたから、僕の代わりに行ったんで…。それは、いつまでも忘れられんなあ。

（小川 常三さん）

第53師団のHさんがビルマでの行軍中にマラリアを発症した時の様子です。

わたしも行軍中にマラリアがでて、40度ぐらいは熱が出ますわな。フラフラですわ。杖みたいなのをこさえてもろて、唸りもって歩いてたんです。えらい班長やったと思いますけども、自分の背囊の上にもう一つわたしの背囊を持って、「Hがんばれ」と言いもって、一緒に付いてきてくれたんです。それがまた不思議なことに40度の熱が出て歩けるんです。そして、どれくらいかなあ、10分か、20分ほど経つと、ほと、また熱がすうっと下がるんです。そしたら、「すみませんでした」と背囊をもらって、歩くんです。でも、またしばらくすると、熱が上がってくるんです。そんな状態が1年のうち2～3回、おこりました。病院では薬もありましたが、それ（発症する）までは、ずっとほっといてました。熱が冷めたら、また行軍してました。病気で亡くなった方、ようけいますよ。

（Hさん）

2. デング熱 Dengue Fever

デング熱は、デングウイルスを持つヒトスジシマカ（ヤブ蚊）などに刺されることで感染します。2～14日の潜伏期間の後、発病すると40度近い高熱や激しい痛み（頭痛、筋肉痛）に襲われます。3～5日で熱が下がり、その際、発疹が現れます。英語ではBreak bone fever（骨が折れるような痛みが襲う熱病）とも呼ばれています。

通常では死に至ることが少ない病気ですが、治療してもまれに重症化します。人から人へ直接感染することはありません。



デングウイルス【イメージ図】

【予防・治療方法】

治療薬はありますが、ワクチンやデングウイルスに特化した治療法はありません。最善の策は蚊に刺されないようにすることです。

(参考文献：厚生労働省検疫所ホームページ)

【体験談—医療関係者も罹ったデング熱—】

奥村 モト子さん（大津市）・Nさん（大津市）
ビルマと同じように感染症が蔓延していたフィリピンの病院での話です。父親の反対を押し切って従軍看護婦となった奥村モト子さんは、昭和19年（1944年）にフィリピンに派遣され、伝染病病棟で勤務されました。

ガダルカナルから撤退した赤痢と腸チフスの人たちがいる伝染病病棟だったんです。赤痢とか腸チフスでひどいもんでしたよ。けど「私らは赤痢とか腸チフスとかは口から入るものだから、それさえ予防してたら、絶対大丈夫だからね、だから介護してるもんが病気にかかったというのが一番の恥だからね」と言われた。だから徹底して、鉛筆でも、消毒してね、もう、手洗いから何から十分消毒して、一人も感染しませんでした。

だけど、マラリアとかね、デング熱とかはね、蚊に刺されるでしょ。だから、そういう病気では苦し

みましたわ。デング熱なんか、もう40度以上の熱が出て、もう湿疹が出て、そんなのでも働いてました。激務でしたけどね。やっぱり緊張しとったからかなあ。これがえらいとか、愚痴はいっさいありませんでしたね。

（奥村 モト子さん）

Nさんは昭和13年（1938年）に近衛歩兵第3連隊に入営され、その後、衛生兵となりました。ビルマでの話ではありませんが、Nさんに降りかかったデング熱の体験談を見てみましょう。

軍隊というところは、『運隊』といってね、それは運のいい楽な所へ行った人と、野戦へすぐ行って負傷したり、戦死したり苦勞したりされる人と、別れてしまうんですよ。私は『運隊』のほうでね、あまり苦勞はないんですよ。ほんまにね運の悪い人は、たとえばビルマへ行ったり、ニューギニア行ったり、食うもんも食わんと餓死したりね。私はずっとそんなに苦勞せなんだですよ。

でも、シンガポール陥として、戻ってきたマレーのクルアンゆうとこで、（昭和17年（1942年）11月に）デング熱にかかりましたわ。デング熱というのは、すごいですよ。高熱が出るんですから。トイレいったらね、なんかフーってまるうなつたと思ったら、もう、気がついたら倒れてたですわ。それ見つけてもらって、すぐ医務室でした。1週間何も物食べななですわ。

マラリアなんかは解熱剤がありますけどね。デング熱の薬ゆうのはなかったですなあ。熱下げて自分で治しましたね。

（Nさん）



出征時の奥村モト子さん（本人提供）



衛生兵時代のNさん（本人提供）

（カンボジアのプノンペンにて、猿になつかれました。）



出征する従軍看護婦たちで書きあった寄せ書き

（左端が奥村（旧姓：佐藤）モト子さん）

3. 破傷風 Tetanus

破傷風は、傷口から破傷風菌が身体入ることによって感染します。破傷風菌は日本の土の中にも多く生息しています。不衛生な病院での医療行為で感染することもあります。

感染すると3～21日間の無症状の後、口を開けにくい、首筋が張る、体が痛いなどの症状があらわれます。治療が遅れると体のしびれや痛みが体全体に広がり、全身を弓なりに反らせる姿勢や呼吸困難が現れたのちに死亡します。

〔予防方法〕

予防接種があり、正しい方法で接種を行うと免疫が10年間持続します。

〔治療方法〕

発病した患者には、治療のための血清や抗菌剤を投与します。



顕微鏡で見た破傷風菌（CDC 提供）

（参考文献：厚生労働省検疫所ホームページ）

【体験談—病院に蔓延した破傷風—】

堀田 肇さん（米原市）・奥村 モト子さん（大津市）インパール近郊で負傷した第15師団の堀田肇さんは、サンジャックの兵站病院に運ばれました。

衛生兵がサンジャックの兵站病院へ運んでくれたんです。（病院まで）10kmほどありましたが、そこへ入るまでに一週間掛かりました。制空権を取られてますので、昼はあんまり動けなかったんです。

そこで、びっくりしたのは、破傷風でなくなる人がだいぶんあってね。あれは体が硬直するんです。私の隣に寝ていた少尉も、こっちの人もやられて、私も（破傷風で）死ぬかなと思ってました。軍医がそうならんように、点滴が注射してくれたんです。それで、僕は助かったんかなと、あの当時、思っていました。（堀田 肇さん）

ビルマと同じ南方のフィリピンでも傷ついた兵士たちを破傷風が襲いました。フィリピンの山岳地帯へ撤退した兵站病院で、従軍看護婦の奥村モトさんはこの世の地獄を目撃しました。

病院には薬品やら、包帯・ガーゼやらがもう全然なかったの。激戦地から患者さんが運んでこられても、どうしようもないの。私はバナナの葉っぱを切っておしめカバーの代わりにしたり、患者さんのシャツやらを破ったりして、包帯の代わりにしてたの。

激戦地から運ばれてくる患者さんにはガス壊疽や敗血症ね、破傷風の患者も多かったです。破傷風はうつるでしょ。だからね、意識がなくなってきたら、まだ死んでなくても衛生兵が埋めたんですよ。うつるから。そうするとね、野良犬が掘り返して、足

やらをくわえて、あんなもん食べるのかなあ。もう、この世の地獄やった。(奥村 モト子さん)



出征時の奥村モト子さん (本人提供)
後方の人が奥村さん、京城赤十字病院の仲間とともに

4. アメーバ赤痢 Amebiasis

赤痢アメーバによる消化器の感染症です。病原体を含む感染者の糞便などに汚染された生水や加熱が不十分な食物を飲食することによって感染します。

感染後、通常2〜4週で下痢や粘血便、しぶり腹(トイレにいった後でもすっきりせず、またトイレに行きたくなる状態)などの症状に襲われます。数日〜数週間の間隔で症状が悪くなったりよくなったりします。

世界では毎年約10万人がこの病気により死亡しています。



赤痢アメーバ
【イメージ図】



イチゴゼリー状の粘血便
(国立感染症研究所提供)

【予防方法】

病気の流行地域では、生水、氷、生肉、生野菜などの飲食を避け、食事の前には十分に手洗いしましょう。アメーバ赤痢のワクチンはありません。

【治療方法】

アメーバに対する治療薬があります。
(参考文献：厚生労働省検疫所ホームページ)

【体験談—アメーバ赤痢の犠牲者たち—】

Kさん (長浜市)

昭和18年(1943年)秋、早稲田大学在学中のKさんは学徒出陣で入隊し、ビルマへ送られます。日本に玉音放送が流れた翌日の8月16日、第49師団歩兵第168連隊第5中隊第2小隊長を命じられました。

終戦いうのは知らなかったですね。タンガレーに遊撃陣地を構築中の第5中隊指揮班へ出頭したのが8月16日で、その小隊長に任命されたんです。

そして、8月25日になってから、やっと通達が届いて、武力行動は停止となった。10日遅れてるんです。武装解除があって、一度も人間を切ったことのない軍刀も供出しました。それから日本への帰還まで英国軍の捕虜生活で道路改修作業ばかりしていました。

作業は白骨街道といわれたビルン—パウン間の山道です。第1次大戦の時、敗軍のトルコやドイツの捕虜たちが、このビルン川沿いの山道を切り開き、マラリアのために、ほとんどが病死したと聞きました。この山道を敗走した日本軍も、きれいに見えた川の水にアメーバ赤痢菌が繁殖していることにも気付かず、喉を、胃袋を癒すつもりで飲み、野垂れ死にしていってしまいます。道の脇に時々、白骨が転がっていたんですが、飯盒の蓋をくわえたままの骸骨を見た者もありました。めがねとか靴を拾って、それを使った兵もいましたし、実弾のまま落ちていた小銃弾や手榴弾は、火薬を抜き取り、そのまま火おこしや魚取りなんかに使ったものです。

終戦後、小隊長の最大任務は部下の全員の無事帰国とこころえていたのに、不覚にも兵1名を腸チフスで死なせてしまいました。本人が疾病を隠していたことに気付かず、帰国直前になって隔離され、薄暗い病棟の奥に1人、しょんぼり亡くなりました。

島根出身の年若い補充兵です。遺骨の持ち帰りは許されず、彼の手製の竹箸1膳を遺品に持ち帰り、ふるさとに届けたのですが、悔恨は今も残ったままです。



Kさん（本人提供） 早稲田大学から学徒出陣時



学徒出陣で出征されたKさん資料

左：陣中ビルマ新聞 右：『学徒錬成』



左上：予防接種済証

左下：罹病証明書（マラリア罹病証明書）

右：英字通信誌『FAUJI AKAHBAR』

5. 結核 Tuberculosis

結核は主に、患者が咳などで空気中に飛び散らした結核菌を周りの人が吸いこむことにより感染します。また、結核に感染した牛の乳製品から感染する場合があります。日本では戦後、抗生物質による治療薬が普及するまで、国民病と呼ばれるほど猛威を振るいました。当時（昭和9年（1934年）統計）、結核患者は約131万5千人、年間死者数は約13万人

に及びました。

発症すると、咳や痰、胸痛、体重減少などの症状が現れ、治療を行わなかった場合、発病者の約半数が死亡するとされます。なお、感染者が発症する割合は5～10%です。

【予防・治療方法】

日本では小児へのBCGの予防接種が行われています。また、治療薬として、抗結核薬があります。

【注意】

近年、治療薬がきかない耐性菌による結核感染も確認されています。結核に感染しないため、3密の状態での結核患者との長期間の接触は避けてください。（参考文献：厚生労働省検疫所ホームページ。一部加筆。）

【体験談—結核でも出征した父—】

Uさん（大津市）

Uさんの父親は、満洲で軍の酒保に勤められていた昭和18年（1943年）に結核を発病されました。

入院のため、父だけ病院船で内地に引き揚げたんです。京都の陸軍病院でだいぶ良うなって、岐阜の産業報国会に勤めに行っていた時に2回目の召集令状が来たんですね。（35歳と）年いってましたやろ。結核もまだ完全に良うなってなかったさかい、母は直ぐ（徴兵解除で）帰って来ると思ってたんや。でも、あかんかった。最後の別れは名古屋駅でした。母と弟の三人で門司へ向かう父の列車を見送ったんです。父は列車のデッキから私らに向かって、日の丸の扇をいつまでも振り続けてました。それが最後の別れでした。

戦後すぐに、父の戦友が「仏様にお線香を上げたい」といって、家に訪ねて来られたんです。それまでは父が元気に復員してくれると思って、毎日づ〜と待ち続けていたから、皆、ほんまにびっくりしました。

そのお方が人づてに聞いた話では、父が乗っていた輸送船がマニラへ行く途中で潜水艦の魚雷を受けて沈没したそうです。父は丸一日の漂流した後で救助されたんやけど、そのせいで結核が酷くなって、マニラ陸軍病院に収容されたんです。その頃は毎日のように空襲があって、そのたびに患者も防空壕に

避難しはったそうやけど、父には防空壕に入るだけの体力がなかったんですわ。それで、部下の人から「上官が壕に入られなければ、私たちも避難できません」といわれたんやけど、「そんなこといわんと、君達だけで避難せよ」といってはったそうですわ。

そやけど、その方の話が「人づてに聞いた」ということでしたんで、うちらは「きっとまだ、生きている」という希望を持ってましたんや。

昭和22年（1947年）6月13日に、とうとう「昭和19年10月7日、戦病死」との公報が届きました。それで、母がお仏壇の前で泣き通してましたし、弟ももらい泣きしてた。けど、私は二人の背中を見ながら、「自分だけは泣くまい」とぐっと歯を食いしばってましたんや。



3密状態の輸送船（個人提供）

結核を発症していたUさんの父親が乗った輸送船も、結核の蔓延が危惧されるほど過密に兵士が乗船していたと考えられます。

6. コレラ Cholera

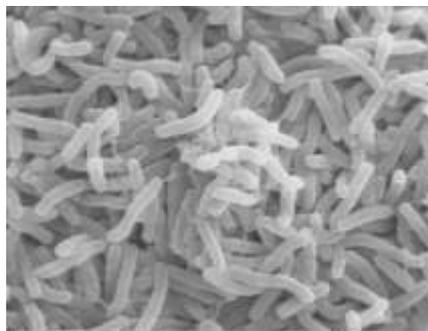
コレラ菌に汚染された水や食料を飲食することで感染します。感染すると、数時間～5日間の無症状期間の後、軽度の下痢または嘔吐が起きます。重症の場合は、コメのとぎ汁のような便を大量に排泄する状態となり、ただちに治療を行わないと死亡することがあります。現在、世界中で毎年13万人ほどがコレラで亡くなっています。

【予防・治療方法】

かつては死の病と呼ばれたコレラも、現在は予防ワクチンや治療方法（抗生物質の投与など）があり、早期に治療をすれば死に至ることが少ない病気にな

りました。

ただ、感染が強い病気であることから、流行地域では生水や加熱が不十分な食物の飲食を避けましょう。



ビブリオコレラ菌（走査型電子顕微鏡画像）

【備考】

19世紀以前にコレラが流行し、たくさんの犠牲者が出ましたが、現在、世界各地で流行しているコレラは死亡率2%程度の病原性の弱い異なる型のものです。

（参考文献：厚生労働省検疫所ホームページ。一部加筆。）

【体験談一敵との撃ち合いよりつらかったのは… 一】

Fさん（甲賀市）

中国の部隊にいたFさんも、タムシ・マラリア・コレラ？など様々な感染症に苦しめられました。

わしらが行ってたんは、中国でも南支那やから、暑いところやったんや。あつこら（中国の広東省周辺）は、病気の巣みたいなどこやから、弾に当たって死んだ人より病気で死んだ人の方が多かったわ。そらあ、戦争って殺し合いやけど、弾の撃ち合いより、雨の中の行軍が一番辛かった。それとな、水虫とタムシ。銭タムシがべったりと体中全部できるんや。それがだんだん、だんだん大きくなってな。それが合併しよるねん。頭から目まで。痒いし、痛いし。雨が降ってきて濡れたら、もう…。ほんで、タムシなんかできてくると、内臓がやられてきよるねん。皮膚が全然いうこときかんから。もう初年兵のころは、どっと、タムシができた。けど、2年目からはできなんだ。なんでやる。免疫ができるのやるなあ。

ほんで、わしはマラリアになったんや。40度ぐらいの熱が三日に一回ずつ出るんや。それがそらあ、

もう苦しいわ。熱が出た最中やったら、ほんまにキニーネちゆうな、熱を押さえる薬。それがまた回ってけえへんねわ。

(部隊がいた) 関東周辺は、世界で一番コレラの発生地やったんや。誰もいない大きな部落があったんや。コレラで3日のうちに全部死んでしもた。井戸の水がみんな一緒やからや。部隊でも、一人コレラで死によってん。一人でも死によったら、その中隊はな、上からものすごう目付けられるねん。中隊長がぼろくそに怒られよるねん。せやから「便所行ったら、手を洗えよ」て、ちゃんと便所当番が付きよるねん。

(終戦後) 捕虜になって、昭和21年(1946年)3月に日本への船に乗ったんや。500人ぐらい乗ったかなあ。日本に着いたのは4月、ひと月かかったんや。ところがな、九州に着いたらな、「その船、待った!」ということになったんや。わしらは、コレラの流行ったところから、乗ったから「全員厳しいチェックせならん」ということになって、浦賀にいったんや。

やっぱり悪い子がいてはったんや。港に繋がれてから(検疫で停泊中に)3人ほど死んどんねん。でもよ、その人らをトランクに入れて、海へ沈めよったんや。コレラで死んだということは、はっきり分かってないけど、死んだものがあるとわかったら、どうされるかわかれへんかったさかい。ようバレへんかったこっちゃ。



第5章 エピローグ

感染症で消えた彦根城の外堀

国宝の天守などが残る彦根城は、日本の城郭を代表する世界遺産候補です。かつて、城には城下町を区切る外堀がありました。外堀は戦争によって勢いを増した感染症のため埋められたのです。

戦後の引揚げ者の中には感染症をもつ人も混じっていました。その結果、マラリアや発疹チフスなど、様々な感染症が日本各地に広がりました。マラリアによる死者数は、昭和22年(1947年)で戦争中の約3倍の450人のぼりました。数年のうちに、各地の感染症が終息に向かう中、湖東地域のマラリアだけは蔓延し続けました。この地域では『おこり』と呼ばれた風土病のマラリアと外地のものが混ざり、流行が続いたのです。特に、市街地のそばにボウフラの発生源となる湿地や城の堀がある彦根市は深刻な状況となりました。

県と彦根市を始めとする関係市町村は進駐軍の指導を受け、マラリアを根絶する事業を行いました。県担当者はデング熱のパネルに登場した元衛生兵のNさんでした。彦根市も戦争中、海軍病院の軍医だったKさん(彦根マラリア研究所長)が中心となり、市街地周辺でのボウフラ駆除を進めました。その一環で主要な発生源であった外堀が埋められたのです。計画では、中堀の一部もなくなる予定でした。昭和31年(1956年)には関係者の尽力もあり、県内のマラリア根絶に成功したため、堀に囲まれた現在の彦根城の景観が守られたのです。

【体験談—滋賀県のマラリアと戦った元衛生兵—】

Nさん(大津市)

Nさんは、近衛歩兵第3連隊を除隊後、昭和18年(1943年)12月に滋賀県庁に就職しました。戦後、Nさんの衛生課予防係に進駐軍からマラリア駆除の指示が届きました。

あの時分、アメリカの進駐軍が県庁の2階全部取ってましたんや。みな往生しよったですよ。一番(運が)悪かったのが教育委員会でしたわ。ひどい通訳がおってね。ほんで、日本人の悪いこと言いよるんですわ。いじめられてたね、教育委員会。

当時は、色んな病気が流行りましたんや。痘瘡と

か、発疹チフスやとか伝染病がでると、今みたいに保健所充実してないでしょ。ほんでに県庁の予防係が各市町村へ行きますねん。注射やとかできるのが、うちの係の医者と看護婦の2人だけでしたんで、僕も注射とか手伝ってた。それで僕のことも医者やと思って「先生、先生」て、呼ばれたんやけど、今やったらえらいことやな。

滋賀県の彦根は日本一のマラリアの発生地やったんですわ。アメリカ人は伝染病をすごう怖がるんですわ。ほんでに、「滋賀県は重点的にそ族昆虫駆除事業（ネズミや蚊などの感染症を媒介する生物駆除の事業）をやれ」て、いわれましてね。

僕の予防係が事業を担当したんですけど、その時分の衛生部の予算の大部分がその予算やったんですわ。1千何百万円って、ごっつい金でしたよ。それを部長と課長と僕の3人でやったんです。僕が実践部隊でした。130いくつある市町村に駆除衛生班というのを、作らすんですよ。市町村の駆除衛生班が職員6人ぐらいで薬まいたりしてましたね。今やったら「環境破壊や」とかいわれますけども、当時は彦根のお城の堀からもう、あらゆるところに薬まきましたね。それで、マラリアがなくなったですよ。ハエもカもノミもいなくなりました。あの事業は僕も（軍隊での防疫業務の）経験がなかったらできませんでしたね。



外堀が埋め立てられる前の彦根城（昭和2年頃撮影。個人提供）

昭和2年（1927年）頃に陸軍によって撮影された彦根城の空中写真です。写真中央に彦根城天守、その手前に玄宮園・楽々園が写っています。

楽々園の東側（現在の金亀公園）が当時、湿地（城山裏大湿

地）であったため、マラリアを媒介する蚊のボウフラの発生源となっていました。彦根市は、マラリア対策衛生土木事業として、昭和33年（1958年）3月までに外堀やこの湿地を埋め立て、市内のマラリアの撲滅に成功しました。



外堀が埋め立てられる前の彦根城東側（昭和2年頃撮影。個人提供）

彦根市街地の地図作成のために陸軍機によって撮影されたとみられる空中写真です。写真左下に彦根城の内堀・中堀が写っており、現在の県立彦根東高校の前身の彦根中学校の木造校舎が確認できます。写真右下には、江戸時代さながらの足軽屋敷の街並み（現在の芹橋2丁目）が広がっています。

写真左側やや上の長細い水溜まりが昭和25・26年度（1950年4月～1952年3月末）に埋められた外馬場町・二番町の外堀です。



外堀が埋め立てられる前の彦根城と琵琶湖（昭和2年頃撮影。個人提供）

彦根市街地の地図作成のために陸軍機によって撮影されたとみられる空中写真です。琵琶湖岸には、近江絹糸の彦根工場（写真中央やや左側）が写っています。戦争中、航空機などを造る軍需工場となっていた近江絹糸や子会社の近江航空は、昭和20年（1945年）7月に数回にわたって、米軍機による空

襲を受けました。7月25日の空襲では、沖縄県から女子挺身隊として働きに来ていた女性が亡くなりました。写真右下に写る中敷町の外堀（カギの手に折れる細長い水溜まり）が、昭和24年度（1949年度）の工事で埋め立てられました。



第26回企画展示「兵士を襲った感染症と飢餓 —インパール作戦とビルマ—」(会期:令和2年7月18日～11月1日) 展示資料一覧

第1章 プロローグ 戦場となったビルマ

No.	資料名	点数	資料説明	提供者名
1	「人員現況表」	1	小林育三郎さん関係資料	個人
2	「事実証明書」(小林育三郎さんの病名証明書)	1	小林育三郎さん関係資料	個人
3	「緬甸地区全日本将兵に告ぐ!!」	1	小林育三郎さん関係資料	個人
4	「陸海軍人二賜ハリタル勅語」	1	小林育三郎さん関係資料	個人

第2章 インパール作戦とビルマの戦場

5	ゲートル	1	Mさん関係資料	個人
6	図のう	1	Mさん関係資料	個人
7	Mさんから国防婦人会杉江班への手紙	1	Mさん関係資料	個人
8	日の丸「速水孝男」(名前を墨書)	1	速水孝男さん関係資料	速水藤尾さん
9	千人針	1	速水孝男さん関係資料	速水藤尾さん
10	軍帽	1	速水孝男さん関係資料	速水藤尾さん
11	防暑帽	1	速水孝男さん関係資料	速水藤尾さん
12	飯ごう	1	速水孝男さん関係資料	速水藤尾さん
13	寄せ書き日の丸	1	堀田肇さんの寄せ書き日の丸	堀田 肇さん
14	双眼鏡	1	インパール作戦で破損した双眼鏡	堀田 肇さん
15	引揚証明書	1	峯森清太郎さん関係資料	峯森清夫さん
16	予防接種の証明書	1	峯森清太郎さん関係資料	峯森清夫さん
17	峯森清夫さんから父清太郎さんへの手紙	1	峯森清太郎さん関係資料、捕虜収容所から送った手紙	峯森清夫さん
18	在隊経過録(昭和19年2月10日～昭和22年7月5日)	1	峯森清太郎さん関係資料	峯森清夫さん
19	問題集「秘 大河渡河」清水見習士官	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
20	事実証明書	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
21	千人針	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
22	印鑑「安第一〇〇三〇部隊印」	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
23	印鑑「工兵第五十三連隊副官士印」	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
24	「秘 大河渡河」問題集	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
25	千人針	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
26	事実証明書	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
27	軍帽	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
28	軍服上衣	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
29	軍袴	1	清水慶治郎さん関係資料	清水慶治郎さん
30	長靴	1		個人
31	蚊取り粉	1		個人
32	略帽	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
33	略衣	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
34	軍袴	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
35	肌着	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん

36	トランク	1	小林育三郎さん関係資料	個人
37	水筒	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
38	将校用飯ごう	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
39	小鉢	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
40	コップ	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
41	日記	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
42	『ビルマ戦場日記』	1	小林育三郎さん関係資料、小林育三郎著・昭和56年	小林育三郎さん
43	日記1（昭和20年8月29日～年末）	1	小林育三郎さん関係資料	個人
44	弁当箱	1	小林育三郎さん関係資料、捕虜収容所で使用	小林幸子さん
45	暮石 白	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
46	暮石 黒	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
47	暮盤	1	小林育三郎さん関係資料	小林幸子さん
48	手書きのビルマ地図	1	小林育三郎さん関係資料	個人

第3章 日本軍の感染症対策

49	水筒	1	朝比奈章次さんの水筒	久保田之彦さん・昌子さん
50	防蚊覆面	1		個人
51	防蚊手袋	1		個人
52	鉄カブト	1		峯森清夫さん
53	上衣	1		個人
54	防暑略衣袴	1		個人
55	地下足袋	1		個人
56	ゲートル	1		個人
57	雑のう	1		個人
58	三八式歩兵銃	1		滋賀県
59	毛布	1		個人
60	一人用蚊帳	1		個人
61	医学書『マラリア』	1	戦地で使った感染症関係の参考書	個人所蔵
62	『衛生兵必携』	1	戦地で使った感染症関係の参考書	個人
63	『衛生法及救急法』	1	戦地で使った感染症関係の参考書	三浦芳月さん
64	『陸軍衛生全書』	1	戦地で使った感染症関係の参考書	個人

第4章 兵士を襲った感染症

65	寄せ書き	1		奥村モト子さん
66	陣中ビルマ新聞	1	学徒出陣で出征されたKさん関係資料	個人
67	『学徒錬成』	1	学徒出陣で出征されたKさん関係資料	個人
68	予防接種済証	1	学徒出陣で出征されたKさん関係資料	個人
69	罹病証明書	1	学徒出陣で出征されたKさん関係資料、マラリア罹病証明書	個人
70	英字通信誌『FAUJI AKAHBAR』	1	学徒出陣で出征されたKさん関係資料	個人

※令和7年3月編集